
俺のオナニー物語火魅子伝編～

えぞくろてん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺のオナニー物語火魅子伝編

【Nコード】

N7043Z

【作者名】

えぞくろてん

【あらすじ】

九峪君ありの火魅子伝に万能な主人公をつつこんで好き勝手にします。兎華乃さんぺろぺろ

ネタバレ下ネタ処女作妄想最強自分勝手などが含まれております

いやな予感がしたらお引き取りください危険です。

読んでいて気分が悪くなっても感想に書かないでね！><

読むときは自己責任でお願いします 運営に消されたらごめんなさい

神様まじ神様（前書き）

いろいろとごめんなさい

実際にオナニーするってことじゃなくて好き勝手するってことです
すみません

あと火魅子伝にいくまでに多少時間がかかります。

兎華乃さんをペろペろするまでにはもっと時間がかかります

読んでいて気分が悪くなっても感想に辛辣なことを書かないでね！

神様まじ神様

「ん・・・？ここは？」

朝起きたら夜だった。これって黒魔術？

「こんにちは」

「！こんにちは。・・・私の名前は齋藤夏樹といいます。失礼ですがあなたは？」

気づいたら後ろに美形がいた。

「私に名前はありません。素性を聞いているなら神や悪魔といったようなものです。」

神様と呼んでくれていいですよ？」

「神様！？そうだったのですか」

「ちなみにあなたをここに呼んだのは私です」

「？神様が？」

「はい、あなたに取引を持ちかけようと思ひまして」

「取引ですか？」

「はい、取引内容はこうです。あなたには異世界にいていただきませう。異世界にいくにあたってあなたの望みをひとつ叶えて差し上

げます。そこで魔王と呼ばれる存在を倒すことができればあなたの勝ちです。もうひとつ望みを叶えましょう。ただし死んだらそこであなたの人生は終わりです。何かご質問は？」

「はあ、能力はどのようなものでもかまわないのでしょうか？」

「はい、基本どんなものでもかまいません」

「魔王を倒したら現実世界に戻されるのでしょうか？」

「そこは魔王を倒した時点でその世界にとどまるか元の世界に帰るか選んでいただきます」

「魔王とはどういった存在ですか？」

「魔王とは魔物を引きつれ生き物を殺しつくす存在です。生き物と手を取り合うことはありません」

「私はどのタイミングでその世界に行くことになるのでしょうか？」

「魔王が力をつけ始め、魔物が生き物を襲い始めるちょっと前になります」

「異世界はいつた瞬間死ぬような環境や場所じゃないですよね？」

「はい、基本的な環境は地球と変わりません。異世界にいつてから一月は基本死なないようなところに送らせていただきます」

「言葉や文字はどうなっていますか？」

「基本的には日本語になっています。ただし古代文字などほかにも種類があります。」

「時間制限などがありますか？」

「ありません。強いて言うならあなたが死ぬまでが期限です。別に死ぬまで魔王を倒さなくても結構です」

「魔王倒さなくてもいいんですか・・・」

「はい、まあその場合世界が滅びるかもしれませんが・・・」

「選択できない選択肢を出されても・・・もしいくなら家族に手紙を書かせてもらってもいいですか？」

「はい、ただし私や異世界云々の話はふせてくださいね？」

「はい、・・・あの、神様、もしよければ私が死んだら家族に保険金みたいなものをサービスしてくださいませんか？」

「、まあ少しくらいでしたらいいでしょう」

「神様ありがとうございます」

「さて、そろそろ答えを聞かせていただけますか？」

「ちなみに拒否権はありますか？」

「ありますよ」

「あるんですか」

「あくまでこれは取引ですからね」

「、それではこの取引受けさせていただきます」

「そうですね、私としてはうれしい限りです。承諾を決める決め手は何でした？」

「そうですね、神様が対等に接してくださったこと、丁寧に対応してくださったこと、アフターサービスを充実させてくださったこと、そして何より、」

「なにより？」

「拒否権があったことです。強制されることは苦痛ですからね」

「なるほど・・・それで能力のほうはどうしますか？」

「そうですね、植物を生み出したり成長させたりできる能力をいただけますか？」

「植物をですか」

「はい、苗を出せたり木を出せたりりんごなどの果実だけを出せたり、またその果実にしても大きい小さいの、甘い酸っぱいのなどの特徴を決めて出せるようにお願いします」

「ふむ、ではあなたが名前を知っている植物自在にを生み出せ、また自らの周りにある植物を成長させることができる能力でよろしい

ですか？」

「はい、それをお願いします」

「さて、もうそろそろ送らせていただきますが心残りがありますか？」

「いろいろありますが神様って男ですか？」

「男でもあり女でもありますね。姿を変えることもできます」

「じゃあ美少女になったりもできますか？」

「できますよ」パアアア「これでいいですか？」

「生まれる前から慕い申しておりましたー！ー！」ガバッ

フフフツ「おやおや、それはありがとうございます」

「くっ、神様の心広すぎ・・・こりゃあ宗教が流行るわけだ・・・」

「それではもうよろしいですか？」

「はい、いろいろありがとうございます。これからは毎日祈らせていただきます」

「ニコッ」ありがとうございます、それと私もあなたのことが好きですよ？」

「ままままじつすか！」

「はい、礼儀正しくて（？）私のことを慕ってくれていて取引にもちゃんと考えてから承諾してくださいましたしね。できれば魔王を倒してからもう一度会いたいものです」

「絶対また会いに来ます！そのときはおっぱいもませてください！」

フフフツ「かまいませんよ。またあえることを楽しみにしています」

「まじ神様神様すぎる・・・それではまた魔王を倒したら」

「はい、また魔王を倒したら」

こうして私は能力をつけていただき神様のおっぱいをもみに、もとい魔王を倒しにいくのだった

神様まじ神様（後書き）

更新停止したらごめんなさい

読んでくださりありがとうございます

キングダムソンと最強化（前書き）

おゆるしください

あと序章なんで短いです

キングクリームゾンと最強化

「ここが異世界か・・・無事に着いたようでよかった」

あの後私は神様により異世界に送られた。送られた場所は草原で遠くに町と森があるのが見えた

「まずは能力の確認をしなくてはいけないな。」キヨロキヨロ「周りに誰もいないことを確認して・・・と」

一応しゃがんで発動するところを隠しながらやってみた

「りんごでろー」ドピュッ

「えっなにこの卑猥な生成音・・・」

うそです。本当はドピュッとかいつて出ないかなあとか思いながら出しました

「音まで設定できるとか神様凝りすぎ・・・でもそんな神様が大好きです」

とりあえず祈っておこう

「とりあえずりんご食べてみるか」カプッ シャリシャリシャリ

「いと美味し」

とりあえず能力は無事に発動することができた

「じゃあここからが本番だな・・・」

私がこの能力を選んだのには訳があった。しかし、それがうまくいくかどうかは賭けだった

フー「神様お願いします・・・いでよ！力の種！」

パアッ

「で、出た・・・やった！これで！」

神様のおっぱいがもめる！

（１カ月後）

「ふう・・・もうこつちに来てから一月か・・・」

私がこつちに来てからはや一月がたっていた。その間私は森で能力を使いまくり種や実などを食べまくる生活をしていた。

力がない状態だといくら能力を持っても無事に過ごせるかわからないからだ。

いや、むしろ能力に目をつけられて何が起こるかわかったものじゃない。なので草原で第一次種大食い大会を開催してから森でベジタリアン生活を送っていた

「んじゃあそろそろいきますか」

神様の保障つきの一ヶ月が過ぎたしもつ野生生活は勘弁してほしいか
つたのでそろそろ町に行くなり魔王退治に行くなりすることにした。

齋藤夏樹(21)

男

レベル232(天使の種(レベル3上昇)77個完食)

HP 999(レベル上昇、命の木の実99個完食)

MP 666(レベル上昇、ふしぎな木の実99個完食)

力 999(レベル上昇、ちからの種99個完食)

体力 999(レベル上昇、まもりの種99個完食)

すばやさ 1008(レベル上昇、すばやさの種108個完食)

きょうさ 999(レベル上昇値、きょうさの種99個完食)

かしこさ 666(レベル上昇、かしこさの種99個完食)

運のよさ 777(レベル上昇、ラックの種255個完食)

かつこよさ 2800(レベル上昇、うつくし草2728本完食)

その他いろいろ

今の状態

身長130cm

28kg

魔法使い予備軍 紳士

巨乳

黒髪長髪

どこかのサイズ 通常値 5cm 最大値20cm ピンク色

うつくし草の食べすぎで理想（神様）に近づいた結果このような姿に。

本人はかなり幸せな様子

キングダムソーンと最強化（後書き）

お読み下さりありがとうございます

キングクリームソンと再会（前書き）

これで導入部は終わりです。
次から火魅子ります

キングダムソンと再会

3年後

「これでようやく終わりか・・・」

3年かけてついに私は魔王を倒すことができた。最初はデイスガイア的な世界でこのステータスでもぼこられたらどうしようなどどびくびくしていた。うつくし草を食べてみたら理想の姿（ロリ神様）になっていったので戦力そっちのけでたばくっていたのだがそれが原因で死んでしまったら末代までの恥だ

「まあ、私が末代だからいいんだけどね」

感傷にひたつてついどうでもいいことを口走ってしまった。実際は町でのんびりしながらナンパしてくるやつらを洗脳、

改宗させて教徒をふやしながらもずっと一人で旅を続けていた。

魅力を上げすぎたせいで厄介ことも多かったが全てを圧倒的なステータスで乗り切ってきた。

王族まじうざす。権力者は厄介ごとの種なのでできるだけかわらないようにしてきた。

あとはきとうに楽しみながら魔物を狩っていった。

正直一月で終わらせられる気がする旅だったが楽しみたかったので3年もかかってしまった。

黄金桃（寿命50ヶ月延長）、世界樹の葉、復活の草を持っている私に魔王がかなうはずもなく戦い自体は3分もかからなかった。

最後には人口の4割を改宗させることに成功した私は満足して神様

を待っていた

「お久しぶりです、魔王討伐おめでとunggございます」

「かかかみしゃまー！ー！」「ガバツ」「お会いしとunggございましたー！ー！」「モミモミモミモミ」

フフフツ「少し姿は変わったようですが中身は変わっていませんね」
ニコツ

「あいかわらずなんという心の広さ・・・出会いがしらにおっぱいをもみしだいても文句のひとつもないなんて・・・」

「面白いものを見せてくださったお礼ですよ」

「ん？面白いもの」

「はい、あなたの旅は全て見させていただきました。私のために信者を増やしてくださってありがとうございます」

「どういたしましてー！ー！・・・てことは私のオナニー生活も？」

ニコツ「3年間ずっと私でしてくださってありがとうございます。
こんなに思われて私は幸せですよ？」

「ギエピーー！ー！なんという恥ずかしさ！うれしくて恥ずかしくてどうにかなくなってしまいそうです・・・」「アババババ

フフフツ「そのときは責任をとってお世話して差し上げます」

「く、お世話されてえ・・・、いや、もう逆にお世話してやる！覚悟してくださいよ！一生尽くしちゃいますからね！」

「はい、そのときはお願いしますね？」

「神様が神様過ぎてほんと何もいえない・・・」

「それでどうしますか？この世界に住みますか？それとも元の世界に戻りますか？」

「ん～～～、元の世界に帰りたいです」

「はい、わかりました。もう行きますか？」

「はい、やりたいことは全部やったんで」

ニコッ「それでは帰りましょうか」

「あ～～～久しぶりのシャバの空気はたまらんですたい・・・」

「魔王を倒した願い事は何にしますか？」

「あ～～～、この能力を持ったままいろいろな世界をまわってみました」

「なるほど、いいですよ」

「ありがとうございます。あとたまに神様に会いに行ってもいいですか？」

「いいですよ」「ニコッ」「いつでもどうぞ」

「かみさまーーーーー！大好きです！」ガバッ

ナデナデ「あなたは甘えん坊ですね」「ニコニコ

「神様は全世界一の甘えさせ上手やでえ・・・」スリスリスリ

「それでは早速行きますか？」

「ん~~~~、しばらくまってもらっていいですか？すごいわがまま
やっちゃったんで戻ってこれたぶん家族に孝行したいんです・・・」

ニコッ「はい、わかりました。行くのはいつでもいいですよ？」

ニコッ「ありがとうございます、神様」

キングダムソンと再会（後書き）

お読みいただきありがとうございます

火魅子伝突入（前書き）

これからコピファンタジー俺のオナニー物語をよろしく！

火魅子伝突入

「もうそろそろいこうかな？」

しばらく実家で家族孝行したので私はそろそろ出発することにした。最初別物になっていた私に驚いていた家族だったが説明したら受け入れてくれた。

「ほんまワイは幸せモンやでえ」

こんな優しい家族のために私は3ヶ月ほど尽くしまくった。世界中の果物や野菜、さらには異世界の食べ物さえも出して奉仕した。みんなよろこんでくれた。やりたいこともやったので、家族に再会を近い神様に会いに行った

「ではどこの世界にいきますか？」

「火魅子伝の世界、それも九峪君が呼び出されたところでお願いします」

「わかりました、それではいつてらっしゃい」ニコッ

「はい！いつてきます神様！」ニコッ

その日九峪と日魅子は日魅子の遺跡の発掘をしている養父の姫島教授の下へ、週末の連休を利用して遊びに来ていた。

発掘の手伝いは楽しく、また親しいものと来ているとあって九峪は楽しい休日をご過ごしていた。

しかし、遺跡で未知の銅鏡が発見されてから状況は変わった。発掘メンバーの全員が銅鏡の発見に喜び、興奮したのまではよかったのだが、

そこから日魅子の様子がおかしくなった。話しかけても空返事ですうにも心ここにあらずといった感じなのだ。

そして夜になると日魅子は一人ふらふらと外に出て行った。それをおかしく思った九峪は日魅子の後をつけていった。

「日魅子！」

「あつ、九峪？」

「どうしたんだよ、さっきから何か変だぞ？」

「呼んでるんだ・・・」

「呼んでる？呼んでるって何が・・・あっおい！」

日魅子は九峪の問いかけに答えず、発掘物を置いてあるプレハブに入ってしまった

「おい、いくら発掘の手伝いをしているからって勝手に入ったりし

たら怒られるぞ！」

「邪魔しないで！」

「な、何なんだいったい？・・・」

日魅子は九峪の忠告を聞かず、そのまま昼に見つけた銅鏡を持った日魅子が銅鏡をもった瞬間、銅鏡が光を放ち、どこからともなく声が聞こえてきた

ようやくあえたね さあ いこう きみがいるべきせかいへ

そして光が最高潮になったとき

「日魅子ーーーーー！」ガッ

九峪雅比古は直感的に日魅子に体当たりしていた。体当たりされた日魅子は銅鏡を落とし、プレハブの壁へと飛ばされた

「だ、大丈夫か日魅子！」

そついい九峪は日魅子の元へ駆け寄ろうとしたが体が動かなかった

「こ、これは・・・！？」

下を見ると銅鏡からあふれ出た光が自分の周りにまわりついていた

「日、日魅子・・・」

そして九峪の意識は薄れていき 九峪はこの世界から消えた

火魅子伝突入（後書き）

実際にコピペしてるわけじゃないですけど
単行本片手に書いてるんでおなじことですよ

ようやく合流（前書き）

作るの難しすぎ・・・説明会はほとんど丸写しにしてしまった・・・
漢字変換が大変なものは当て字でいかせていただきます
いろいろひどいですけどご容赦ください。
少しづつよくしていけるようにがんばります

ようやく合流

九峪は気がつくと、鬱蒼とした森の中にいた

「どこだ、ここは？」

九峪はまだ上手くまわっていない頭を働かせながら周囲を見回す。

「どういつことだこりゃあ。ここはどこだ？ いったい何が起こったんだ・・・」

九峪が混乱していると不意におかしな声が聞こえた

「あれえ？ 何で君が？」

あわててもう一度あたりを見回すと、自分の2mくらい前におかしなものが浮いているのに気づいた。

夢を見ているのだろうか？ 夢にしてはやけにリアルな夢だ。まあ、夢なら夢でかまわないから訊くだけ訊いてみるか

「なんだ、おめえは？」

「やあ！ 僕は天魔鏡の精さ。そうだな、ま、キョウちゃんとも呼んでおくれよ」

約50cmほどのそれは片手を挙げて九峪に挨拶してきた

「そして私は地獄からの使者、スパイダーマッ！」

いつのまにかキョウの横にいた女の子（？）がポーズを決めながら
そう宣言した

「おわっ！？どっからでてきた！？」

「えっ！？君は誰だい？」

「ん、九峪君のストーカーさ、九峪君が世界を超える気配がしたから追ってきたんだ」

「俺のストーカー！？」

「！？へえ、世界を超えて追っかけてきたのか。最近のストーカーはやるなあ」

「まあ嘘なだけだね」

ガクッ「嘘なのかよ、変なやつだな。そっぴやそっぴちにいる天魔鏡の精つてのはいったいなんだ？」

「君も見ただろう？昼に遺跡で発掘された銅鏡を。あれが天魔鏡なのさ」

「あの銅鏡！？じゃあお前はあれに宿っている精霊みたいなもんだっというのか！」

「そうそう、それだよ。それ」

「こんなちんくりんが・・・にわかには信じられないな」

「信じられないっていつても、現にこうしているじゃないか」

「じゃあその天魔鏡の精様に訊きたいんだがよ、いったい何が起こったんだ！？ここはどこだ？どうして俺はこんなところにいる！？」

「え、えーと・・・」

「えーとじゃねえ！これはおめえの仕業なんだろ！？きつちりと説明しろ！」

「いや、あのね？つまり・・・これは間違いで、その、予定とは違って・・・君があんなことをするから、ああ僕はこれからどうすれば・・・」

「おい！ぶつぶつ言ってねえちゃんと説明しろ！」ガクガクガク

「わ、わかったから手を離して！」パツ「乱暴なんだから、もう」

スツ「早く説明しろ」

ビクッ「わ、わかったよ。そうだな、ここは古代の九洲。そうだな、君たちの歴史で言うなら三世紀ごろかな」

「三世紀の九州だあ！？」

「うーん、ちょっと違う。九州じゃなくて九洲。ここは君たちの世界につながっている世界じゃないんだよ。パラレルワールドとでもいいえいいのかな」

「パラレルワールドだって？はあ・・・常識じゃ考えられない事態

になっていることだけは確かみたいだな・・・
まあいいか。それより、はやく還せよ」

「えっ!？」

「えっじゃなくて、お前が間違っで連れてきたんだろ!間違っでたんならさっさと還せ」

「無理だよ」

「なにい!？」

「僕、時をさかのぼることはできても、もう一度下ることはできないんだ」エヘン

ブチブチブチッ「どういうことだてめえ!そんな無責任なことが許されると思ってんのかこらあ!」ガシッ

「ひいいいー!？わ、わかったから手を離してえええ!」

「本当は還れるんだろ!」

「いや、その・・・」

「還れないってのか!？」

「か、還れる、還れるさ、もちろん」

「どっちゃって?」

「え？いや、その・・・」

「てめえ！口からでまかせ言ってるじゃねえだろうなあ！」

「ち、ちがうよつ、だから、その・・・そう火魅子、火魅子さ。邪馬台国を復興させて火魅子を立てれば、君は元いた時代に還れるよ」

「火魅子だと？」

「そうじゃなくて火魅子。邪馬台国の女王、火魅子だよ」

「どうということだ？」

「火魅子だけが動かせる時の御柱つてのがあって、それがあれば君を元の時代に還すことができるんだ」

「時の御柱ってなんだ？」

「時を移動するための仕掛けみたいなものだよ」

「ふうん、タイムマシンみたいなもんか、じゃあ、それがあれば俺は還れるんだな」

「で、その火魅子ってのはどこにいるんだ？」

「いないよ」

「どういつことだてめえー！？」ガクガクガクガク

「ぐわああー！？や、やめてええー！ー！ちゃんと方法は

あるから！」

「思ったより長いからそろそろ私も説明しちゃうかな」

「おわっそういえばお前もいたのか」

九峪達は熱くなってすっかり忘れていたが夏樹はスパイダーマゴっここに満足して今まで傍観していたのだった

この世界は天界、仙界、人間界、魔獣界、魔界があり邪馬台国王族は天界人の血を引いていてたまに強力な力を持った女性が生まれる。その女性を火魅子として国を運営していったのだが血が薄れていくにしたがって長い間火魅子が生まれないときができた。

その隙に魔獣界や魔界から魔人などを召喚した狗根国に滅ぼされてしまった。滅ぼされてから十数年たち、

各地に散っていた火魅子候補が育ってきたので邪馬台国を復活させましょう。そしたらついでに九峪君もおうちに還れるよ 今ここ

「それでなんで俺が呼ばれんだよ！」

「実は君のガールフレンドの日魅子ちゃんは邪馬台国王家の人でね。しかもかなり強力な力を持った。狗根国に滅ぼされたとき

九峪君の世界に自力で逃げ込んだんだ。まあ幼かったから覚えてないようだけど。それでキョウさんは日魅子ちゃんを呼び出そうとしたんだけど九峪君のスペシャルプレーでこうなったわけだね」

「まじかよ・・・」

「あと九峪君が還りたいなら還してあげるよ」

「！？還せるのか！？」

「うん、まあその場合日魅子ちゃんにこっちに来てもらうことになるけど」

「できるのっ！？」

「どういうことだ」

「日魅子ちゃんは邪馬台国の王族だしなあ。元からキョウさんは日魅子ちゃんの方を呼び出すつもりだったし。

九峪君を還すならば本来の思惑通りに日魅子ちゃんの方を呼ばないと。ちなみに邪馬台国の復興を手伝うと少なくとも確立で死にます。どうする九峪君、

君が日魅子ちゃんの代わりに邪馬台国の復興を手伝うなら日魅子ちゃんをこっちによばなくてもいいしついでに私も手伝うよ。

でも還りたいなら私が元の時代まで送ったげよう。代わりに日魅子ちゃんを連れてくることになるけど」

「・・・日魅子をこんなところに連れてくるわけにはいかねえ」

「じゃあ？」

「俺が邪馬台国を復活させてやろうじゃねえか！」

「かつこいいなあ九峪君は」ニコツ「そんじゃまあ邪馬台国の復興目指してがんばっていきますか！」

「おう！でも復興って言ったって俺は何をすればいいんだ？」

「それは僕にまかせてよ！今まで邪馬台国の復興が成せなかったのは邪馬台国の旗印となる存在がいなくて求心力がたりなかったからなんだ。」

でも今は火魅子候補に邪馬台国の神器たるこの僕、それに神の使いの三点セットが存在してるからまずはその三点セットを集めよう！」

「お前って神器だったのか・・・まあそれはいいとして神の使いってのはいったいなんだ？」

「やだなあ、君の事に決まってるじゃないか」

「なんだとお！」

「いや、だって考えてもごらんよ。君が素直に僕はことよく似た未来の別世界から来た高校生ですっていつても誰か信じてくれると思う？」

「ぐっ」

「だからね、神の使いを名乗るの」

「いいのかよ神器がうそついて」

「いいのいいの、言ってることはうそだけどやることはかわらないんだから」

「そんなもんか・・・」フウツ「わかった、還るためなら神の使いとやらになってやるうじゃねえか」

「そうそう、悩んでたってしかたないんだから前を向いて歩こうよ。それじゃあまずは伊雅を探そう」

「伊雅？」

「かつての邪馬台国国王の弟さ、まずは彼を見つけて寝食を保障してもらおう。伊雅は邪馬台国の残党勢力とも連絡を取り合ってるはずだし、火魅子候補の居場所がわかるかもしれない。

それに伊雅は神器を持っているから同じ神器の僕は大体の居場所がわかるのさ」

「そうか、まあここでぐだぐだしててもしょうがないしな。まずはその伊雅ってやつのもとに行くか」

「そうそう、まずは行動だよ」

「それじゃあ話もまとまったようですし行きますか」

「ちょっと待て、そういえばお前はいつたい何者なんだよ」

「そうそう、九峪は僕が日魅子と呼ばうとして間違っって呼んじやつたけど君にいたっては呼んですらいらないじゃないか」

「ん、ああああ、私も昔異世界に飛ばされたことがあってね、それで同じように異世界に飛ばされてしまった九峪君のことが気になつてついストーリーキングしてしまったんだ」

「お前も異世界に！？」

「うん、私の場合はファンタジー世界に魔王を倒しに行ったんだけ

どね。そのときにつけてもらった能力でこうしてストーキングしたりしてるわけだよ」

「魔王か。俺もそっちの世界がよかったな。何かゲームみたいで。それで能力つてのは？」

「能力は植物を生み出したり成長させたりする能力と世界間を移動する能力だね。こんな風に」ドピュッ

「食べるかい？」

「りんご自体は美味そうだがなんだよその出すときの音は・・・」

「ごめんごめんわざとだよ」

「わざとかよ！」

パツ「これでいいかい？」

「あ、ああ・・・」ガプツシャリシャリシャリ

「うまつ、なんだよこれめっちゃ美味いじゃねえか！」

「ふふふ、そうだろうそうだろう私がおなかをいためて生み出したりんごはおいしいだろう」

「なんだか急に美味くなくなった」

「冗談だから気にせず食べてくれ。りんごに罪はないからな」

「ああ・・・」シャリシャリシャリ

「まあ私がいるから道中の食料は心配しなくてもいいよ。力も魔王を倒すくらいあるし、熊が出てても夕食行きだよ」

「なんだよ、思ったよりも簡単に復興できるんじゃないか？」シャリシャリシャリ

「ところがそうもいかないんだな。私はあくまでも九峪君のつきそいだからね、サポートくらいしかないよ」

「なんでだよ！」

「正直私は邪馬台国に関係ないからね。日魅子ちゃんは王族だから、九峪君は日魅子ちゃんを危険な目にあわせないため。だけど私は九峪君のその心意気にほれたってくらいしか理由がないのさ。だから手伝いはするけど全てにおいて頼られても困るな」

「そうか・・・まあ手伝ってもらえるだけいいと思うか」

「そうそう前向きにいきましょう九峪君。私の名前は齋藤夏樹さ。気軽になっちゃんでも齋藤さんでも好きに呼んでくれ」

「ああ、これからよろしくな。しかし自分でさん付けするか普通・・・」

「まあ私は九峪君よりもだいぶ年上だからね。さん付けしても罰はあたらないよ」

「年上！？そのなりでか！？」

先ほどから夏樹がちょこちょこ忘れられてたのはちっちゃくて視界に入っていないということもあってだった

「今年で24になりました。ああどどん魔法使いに近づいていく・・・」

「24!？」

「異世界に行ったときにいろいろあつてね。こんな素敵バディーになつてしまったのさ」モミモミモミ

「自分の胸をもむな！」

「なんだい九峪君、私のおっぱいをもみたいのかい？」

「うっ、い、いや、誰がそんなもんもむか!」

「おっぱいをそんなもん扱いするなんてこの世界に嫉妬団がいたら誅殺されているよ・・・まあいい、もみたくなったらいつでも言うておくれ」

「そんな機会はないと思うがな」

「そのときは無理やりもませるからいいよ」

「やめろ！」

「だが断る」

「そろそろ出発しよっよ・・・」

ようやく合流（後書き）

つっこみどころはいろいろあると思いますが考えるな感じろの精神で気にしない方向でお願いいたします。

移動中（前書き）

短い話が進んでないしものすごくオナツてます。
閲覧注意

移動中

くあらずじく

邪馬台国は九州にあった邪馬台国は本州にある狗根国に滅ぼされる。狗根国の戦力は魔人や魔獣を召喚してさらに魔界の黒き泉に入り超常的な能力を得た幹部など。

邪馬台国はヒミコオンリー。ヒミコは王家の超常的な力が強いものになる。

けど今はいない。

この世界では法術という魔法のようなものがある。

狗根国は邪馬台国に伝わる(？)天界の扉というものを探している。ヒミコ候補が育ったので反撃しようとする。

邪馬台国の神器が現代からヒミコと間違って一般人九峪君を召喚。勝手に主人公がついてくる。

しかたないから九峪君を神の使いつてことにして邪馬台国復興を目指す。

とりあえず元王弟伊雅を探す
以上

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・んっ、九峪君！出るよ！」ビュ
クンビュクン

「・・・、齋藤さん、変な音出しながら食べ物出すのやめてくれよ・
・・・」

「ちえー、九峪君はヒモのくせに厳しいなあ」

「ヒモって・・・」

「ふっふっふ、実際に今の九峪君は私のヒモにすぎないのだよ。一人だと食べ物も満足に入手できない、寝床も確保できない

、野犬一匹相手に致命傷、お風呂も沸かせない、トイレでお尻を拭くことすら（紙がないため）できない。

童貞。どうだね九峪君、働かないで食べるご飯はおいしいかい？」

「確かにそのとおりだけどもつと他の言い方はないのかよ！」

「ほほおゝん？そんなこと言っちゃうのかい？それなら私にも考えがあるってもんだよ」

「な、なんだよ・・・」

「はじめてあったときから九峪君は襲い甲斐がありそうだなって思ってたんだ」

「おい、冗談だろ？」

「ひゃっはゝあ」ガバッ

「うわっ！」ドサッ

「ぐへへへへ、たっぷりかわいがってあげようじゃまいか」ニマァ…

「おい馬鹿！やめろ！」バッ

パシッ「おっと、無駄な努力だよ九峪君。むしろ興奮するね」ハァ

ハアハア「どうだい九峪君、この世の中は力がないと何もできなくて、

そして君はこんなに無力なんだよ。」クリクリクリ

「乳首をいじるな！」

「いやじゃ」

「くっ、確かに無力かもしれないけどなあ、俺はあきらめねえぞ！力がなくなつて何か方法はあるはずだ！俺はなんとしてでも邪馬台国を復興させて元の時代に戻るんだ！」

「やっぱりかつこいいなあ九峪君は。」ヒョイツ

「え？」

「ん、なんだい九峪君、そのまま童貞をいただいて欲しかったのかい？」

「んなわけあるか！」

「むしろ私の童貞をもらつてくれ」

「断る！ え？齋藤さんつてもしかして男なのか？」

「そうだよ。魔法使い街道一直線だよ。ちくしょう、もう九峪君で童貞すてちゃおうかな」

「頼むからやめてくれ！」

「しかし処女でもある」

「どっちなんだよ」

「男だよ。男でもお尻が未使用の場合処女を名乗ってもいいのさ」

「全国の女の人に殴られるぞ」

「でも九峪君になら処女あげてもいいよ／＼／」

「いらねえよ！」

「ちっ、後で処女奪ってやる・・・」

「やめろ！」

「二人ともそろそろ休憩終わりにするよ」

テクテクテク「結局さっきのはなんだっただよ・・・」

「この世界の怖さをちよつと体に教えただけさ」

「もっとやり方ってもんがあるだろうが」

「そこは私の趣味だね」

「悪趣味だな」

「照れりんぐ」

「どこに照れる要素があつたんだよ・・・」

「九峪君の発言全てが照れ要素さ。んっ？伊雅さん達がこつちに気づいたようだね。こつちにむかつてきてるよ」

「おっ本当か！助かった、もう結構疲れてたんだよな。それで伊雅さんとやらは今どこらへんにいるんだ？」

「向こうの方角にあと百キロってどこだね」

「冗談だろ？ここが東京だったら熱海までついちまうぞ！」

「ほんとだよ、歩けないなら私がおぶっていいこうか？ただちょっと背負ってる途中お尻を開発してしまうかもしれないけど・・・」

「誰が乗るか！もっとましな方法はないのか？」

「まあ向こうから向かってきてるから黙ってても合流はできるんだけど・・・、そんな甘えてると興奮した私に襲われるかもしれないよ」

「仕方ない、もうちょっと歩くか」

「倒れるまで歩いたらちゃんと世話するから大丈夫だよ」

「何かあんま安心できないなあ」

「心外だなあ。身の危険を感じるけど実害はないって評判なのに」

「俺その人たちと友達になりたいな」

「元の時代に戻ったら紹介してあげるよ。齋藤被害者の会と」

「おまえ元の時代で何やったんだよ！」

「今と変わらないよ」

「なんていうか齋藤さんってぶれないなあ」

「ありがと。九峪君は初異世界で疲れてるだろうし近くにある今は奉られてない神社にいつて伊雅さんを待とうか」

「そんなところがあるのか、よし、早速行こうぜ」

「もう、九峪は調子がいいんだから」

移動中（後書き）

次話は三日以内に投稿したいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7043z/>

俺のオナニー物語火魅子伝編～

2011年12月27日22時49分発行